京都市内の埋蔵文化財発掘調査速報　No.024（R4-2）

平安京跡・西ノ京遺跡

調査期間：令和４年　７月６日（水）～　７月２７日（水）
調査機関：京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課

1　はじめに

調査地は、西大路通と御池通の交差点の南西にあたる中京区西ノ京下合町に所在し、周知の埋蔵文化財包蔵地「平安京跡（右京三条二坊十四町跡）」と「西ノ京遺跡」にあたります（図１）。

調査地周辺では過去に多くの発掘調査が行われており、平安時代前期の建物や井戸、条坊関連遺構が見つかっています。特に調査地の北側に位置する調査では、平安時代前期の宅地の様相が分かったほか、平安時代から室町時代の人工河川（「野寺川」もしくは「野寺小路川」）が見つかっており、水を引き込むための水利施設も見つかっています。このことから今回の調査地にも、同様の遺跡が広がっている可能性が高く、発掘調査を行いました。

2　今回の発掘調査

今回の調査では、北と南の２か所に調査区を設定し、北・南区ともに、南北方向の河川（SD01）と南北方向の溝（SD02）を確認しました（図２）。

北区のSD01は幅が2.8ｍ以上、深さ0.86ｍ、底面は平坦で、堆積した土から穏やかな水の流れであったことが分かります。南区のSD01は幅が2.4ｍ以上、深さ1.2ｍ、断面の形状は逆三角形で、河川の氾濫のような強い流れがあったことが分かり、北区と南区は近接しているにも関わらず、異なる様子を示していました。また両区とも、西肩から東へ２ｍ程の場所に直径５～６㎝の木杭が南北方向に並んで打ち込まれ、南区ではこの杭を覆うように人為的に貼り付けた堆積土とこの堆積土の裾近くに人頭大の石を据え、しっかりと西肩の護岸工事を行い、河川の氾濫に対処していた痕跡を確認しました。出土遺物から平安時代中期頃から室町時代まで維持されていることが分かり、人工河川である野寺川の一部であることが分かりました。

SD02の幅は0.8～1.1ｍ、深さは0.15～0.3ｍです。この溝は十四町の東を限る築地想定位置から東に約２ｍの場所に位置し、野寺小路西側溝と考えられます。出土遺物から平安時代中期には埋没したと思われます。

3　人工河川と右京域

今回調査した右京三条二坊十四町の周辺では、平安時代前期の大規模邸宅跡が複数見つかっており、平安京造営時には、にぎわっていたことが分かります。しかし、平安時代中期の貴族の随筆文である『池亭記』には、「西京は人家漸く稀くにして、殆に幽墟に幾し。人去ること有て来ること無く、屋は壊るること有りて造ること無し。」と、右京の衰退をうかがわせる記載があります。右京域は左京域に比べ土地が低く、河川の氾濫などの影響で、右京域が早い時期から衰退していったと考えられています。

では、右京から人がいなくなり、本当に荒地になってしまったのでしょうか？

今回確認した野寺川は、大規模建物などが衰退した後に開削され、室町時代まで維持されていることが分かりました。これと同時期に、十四町の西側の道祖大路が河川化し、道祖川となっています。また平安京遷都時からの基幹水路である西大宮大路の側溝の規模も拡大し、河川化します。（図３）これらの人工河川は、右京の排水機能の向上のために造られたと考えられており、逆に言えば、この規模の河川を維持するだけの必要性が、この地域にはあるということを示すものです。

今回の調査では、大規模邸宅を所有できる上級貴族は去ったものの右京には人が住み続けており、居住している人々の生活を守るために人工河川が造られ、維持されていたことが分かりました。

（奥井智子）

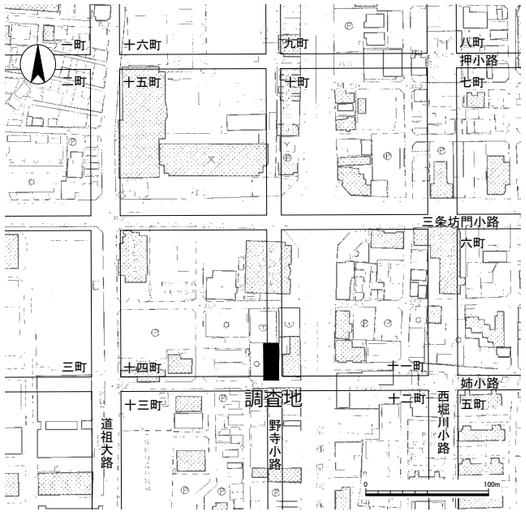

図１　調査地位置図（1/5,000）

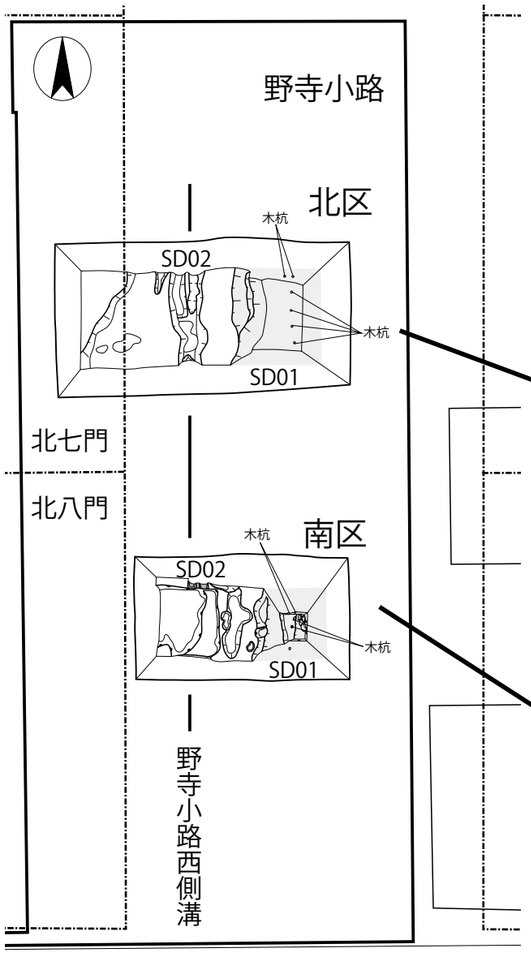

図２　調査区平面図（1/200）

図３　調査地と右京の河川変遷について
南孝雄「衰退後の右京 - 十世紀後半から十二世紀の様相 -」『平安京の地域形成』2016　図４- ３に一部加筆。※●は調査地点

北区全景（北東から）

南区　SD01（野寺川）完掘状況（南東から）